

「キノコの山 (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「キノコの山」は山荘の敷地隅に(不法ではなく)投棄された、刈り芝に大発生した。



ここは、沢の上部の斜面で、雨水の通り道で地面の水分が多く、キノコ尾発生には適した環境になっているのだ。



キノコというのは、地中、樹木中などに存在する「菌糸体」の上に発生した、目に見える大きさの「子実体」をさす。通常菌糸体は地中や樹木中で休眠または増殖しているが、何かの刺激(急激な環境変化)---たとえば晴天のあとの雨、低温が続いたあとの高温などが起きると、一斉に発生することが多い。このヒトヨタケの仲間の場合、恐らくは刈り取る前の芝の土中にもともとあった菌糸体が、刈り取られた芝と一緒に運ばれて、その中で急激に増殖したのだろう。



芝の堆積の一部を取り除いてみると、中は真っ白になっていた。これが菌体の「実体」である。触ってみると相当に熱を持っていた。菌類の世界には「早い者勝ち」のルールがある。ある場所---たとえば切り株---はいろいろな菌種が「狙って」いる。最初に「蔓延」した菌種が勝ちで、ほかの種類はもう入り込めないのだ。シイタケの「ほだ木栽培」でも、どれだけ早くシイタケ菌を蔓延させるかが重要で、失敗すると雑菌(たとえばカワラタケ、クロコブタケ、トリコデルマ菌など)に、菌床を「乗っ取られて」しまう。

この刈り芝に発生したヒトヨタケの仲間も、この絶好のロケーションをいち早く占領し、大発生に成功したにちがいない。



ヒトヨタケの仲間は「ヒトヨタケ」の名の通り、事実体は恐るべき速さで成長し、その後、傘の部分が「とけて」しまう。腐ったわけではない。わざととけて、胞子が雨水に流されたり、虫の足に胞子をつけて拡散するという「作戦」なのだ。これを「自己溶解」という。夕方に成長を始めた子実体は、翌朝には完全にとけて写真のようにになっていることが多い。